

2024年7月28日（日）主日朝礼拝説教

『散って行った人々は』井上隆晶牧師
列王記上 21 章 2～7 節、使徒言行録 7 章 54～8 章 8 節

①【自分の罪と戦うことをやめれば、教会は崩れてゆく】

初代教会は非常に力強く、また模範的な美しい姿として出発をしました。聖書にこう書かれています。「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。…信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。…金は必要に応じて、おののくに分配されたからである。」（使徒 4：32、35）すごいなあと思います。理想の教会の姿です。先日、あるキリスト教徒の方から「聖書に出てくるクリスチャンの姿と、現実のクリスチャンの姿があまりにも違い過ぎて、聖書が分からなくなる。」と言われましたが、本当にこんな教会ができるのだろうか、なぜ初代教会ではできたのだろうかと思います。これをモデルとしたのが「共産思想」です。19世紀に産業革命が起こり資本家と労働者の間の格差が目立つようになり、資本主義の問題点があらわになってきました。そこでカール・マルクスは初代教会の姿を理想として「資本論」を書いたといわれています。

しかし、この初代教会の理想の状態も長く続かず、時がたつにつれて内側からも外側からも多くの問題が起こって崩れてゆきます。アナニア夫婦の献金をごまかす問題（使徒 5 章）、ギリシャ語を話すユダヤ人キリスト教徒からヘブライ語を話すユダヤ人キリスト教徒へ苦情が出た食事の分配の問題（使徒 6 章）などです。人間は本来、他人より少しでも楽をしたい、少しでも良い物を持ちたい、というエゴイズム、自分中心な考えを持っています。しんどいことはしたくないのです。共産生活は理想ですが、自分中心という人間の罪の問題が解決されなければ、制度だけでは決して理想社会は実現されません。共産主義だろうが、資本主義だろうが人間が考えた制度では不可能です。

●トインビーという歴史学者は、共産主義はまちがいを犯したのではなく、見落としたのだと言っています。何を見落としたのかというと、人間の弱さ、罪の問題を見落としたのであり、そこに共産主義の大きな間違いがあったと言っています。

罪の問題を解決できるのは神だけです。人間には無理です。ですから神を中心とした生活をしなければこのような理想の生活はできないのです。初代教会が神の国のイメージをもっていたのは、最初はみんな神を中心に生活していたからです。自分中心な人がどんどん増えてくれば、神の国のイメージは崩れて行くのです。修道院が一番、初代教会の姿に近いでしょうね。財産を自分の意志で放棄し、神を中心として生活するからです。ですから、実際は昔も今も教会は変わらないのです。聖霊が降る前の使徒たちもエゴイズムの固まりでした。でもそんな彼らを

キリストは赦し、再び集め、聖霊が降ることによって美しい教会が生まれたのです。神の力が理想の教会を造ったのです。どんな時も自分の罪を見つめて、それと戦い、神を必要として祈る者たちが教会を美しくしてゆくのです。

②【ステファノの殉教】

使徒たちはこの食事の分配の問題を解決する為に、聖霊と知恵に満ちた評判の良い七人の奉仕者を選ぶことにしました。こうして選ばれたのがステファノ、フィリポたち七人でした。「世話をする、奉仕をする」（使徒 6：2、4）という言葉が出てきますがギリシア語で「ディアコノス」といいます。そこで彼らのことを「ディーコン（助祭、補祭）」と呼ぶようになります。祈って手を置かれていますから（使徒 6：6）、信徒ではなく聖職者であることが分かります。こうして教会の中に、監督（主教）、長老（司祭）、執事（補祭）という聖職者制度が生まれていきます。このディーコンであるステファノがキリスト教の最初の殉教者となりました。神を冒瀆し、神殿と律法を汚したという無実な罪で訴えられ、石打の刑で殺されました。彼の顔はまるで「天使の顔のように見えた」（使徒 6：15）といえます。彼が天を見つめると、神の右に立っておられるイエス様が見えました。死ぬ時もイエス様と同じように「この罪を彼らに負わせないでください」と祈って眠りにつきました。本当に聖霊に満ちた、すばらしいクリスチャンでした。ステファノが殉教する時、彼に石を投げつける人の衣服の番をしていたのがサウロです。このサウロが後にキリスト教の大伝道者となります。

③【散って行くということ】

ステファノが殉教することによって、その日、エルサレム教会に対して大迫害が起こり、使徒たちの他は皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行きました。使徒たちがエルサレムに残ったのは、エルサレム教会を守ろうとしたからだと思えます。しかし7章～8章を見ると使徒たちではなく、日常の信徒の世話をしたディーコンや散って行った信者たちの方が、目覚ましい働きをしているのが分かります。こう書かれています。「さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。」（使徒 8：4～5）

12使徒たちは増えて来たキリスト教会を運営することや、教会を守ることで必死だったのではないのでしょうか。でもそこでは神の業はあまり現れず、むしろ散っていた信者たちの方が、使徒たちよりもっと神のために働くことができたようなのです。そしてやがて使徒たちもエルサレムを離れ、殉教してゆくのです。

●第二次世界大戦中の日本の教会の指導者たちは、キリスト教信者を迫害から守らなければならないと考えて、軍隊に協力をしました。当時の日本基督教団議長は伊勢神宮に参拝をしました。これに対して、辻宣道という人の父は日本基督教団の牧師でしたが、天皇の写真に頭を下げなかったという事で警察に捕らえられました。それ以後、信者は教会に来なくなり、信者からは迷惑顔をされ、冷たい

まなざしを受けました。その中で家族だけで礼拝を守ったそうです。そのうち、彼の父は病気になりましたが、差し入れもできませんでした。信者たちもかわいそうに思うけれども、近づいたら逮捕されるので何もできませんでした。ついに父の死の通知が刑務所から来ました。母といっしょにリヤカーで遺体を引き取りに行くと、遺体は冷たいコンクリートの上に置かれていました。火葬場には誰も来てくれませんでした。母と小さな子どもだけで葬ったのです。その小さな子どもだった辻宣道くんが後に牧師になり、日本基督教団の議長になってゆきます。一方、当時、信者に対して非常に配慮した教派は、日本の神と聖書の神は同じだというようなわけのわからないことを言って妥協しました。だから迫害はありませんでしたが、本当の信仰は死んだのです。

迫害は恐ろしく、殉教することは悲しいですが、不思議なように信仰の子を産んでゆくのです。ステファノの殉教を見たパウロはやがて大伝道者になります。そのパウロが今度はリストラで同じように迫害され、石を投げられて大怪我をしますが、それを見ていたテモテがまたクリスチャンになり献身してゆきます。こうして血が流されて、教会は動かないものとなっていったのです。

●榎本保郎牧師はこんなことを書いています。「信仰は口先だけで伝えるものではないと思う。それゆえ私たちはまだ救われていない家族や友人がつかずかなくように配慮する。しかしそのとき、信仰の厳しさを隠して、抵抗なしに入信させようとしなくてだろうか。その結果どこかで妥協したり、信仰を歪めるようなことはないだろうか。そのような配慮で人が信仰に導かれるだろうか。」「私の父には、なぐるとか叱るとかの恐ろしさでない恐ろしさがあった。…父親がひれ伏して恐れおののいて絶対者をあがめて生活する姿が、子どもの心に畏敬の念を与えるのである。」

ああ、本当にそうだなあと思います。この世の物も失わず、来世の物も手に入れようというのは虫が良すぎますし、結局それは中途半端であって何も手に入れられないのではないのでしょうか。私たちキリスト教徒の目標は天にあります。この世の人から見ればバカげた生き方に見え、冗談の通らぬ、つまらん奴だと思われるかもしれませんが、しかし生きる目標の違う人たちとはある所までは共に歩けますが、どこまでも一緒に歩けないのです。この世の物を手に入れたら、天のものは失うのです。信仰の先輩たちは、この世の物を手離し、ある時には自分の生命を手離して、永遠に残る天のものをしっかりと握りしめて天に帰られました。それに倣いたいと思います。今の教会は神の国のことを語らず、現世のことばかり語ります。キリストという命を手に入れることを第一とせず、自分の命を守ることばかり心を注いでいるように感じます。そこには命はありませんし、信仰も伝わらないでしょう。一本筋の通った信仰者になりましょう。